

総務経済委員会行政視察調査報告書

1. 調査月日 令和4年10月18日～10月21日
2. 調査先・項目
- 北海道札幌市
 - ・ARによる防災・消火体験等について
 - ・北海道議会議事堂見学
 - 秋田県横手市
 - ・地域公共交通について
 - ・共助運営体ミニバン運行について
 - ・横手デマンド交通について
 - 山形県天童市
 - ・ふるさと納税について
 - ・(株)天童木工 施設見学
3. 調査派遣委員
- | | |
|------|-------|
| 小田部照 | 山田庫司郎 |
| 栗田政男 | 立崎聡一 |
| 永本浩子 | 古田純也 |
| 平賀貴幸 | 村椿敏章 |
4. 調査結果 別紙のとおり

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会
委員長 小田部 照

北海道札幌市

① (株) 日本防災技術センター ○ARによる防災体験 消火体験

防災訓練は市や消防署等が中心となって地域の防災市民組織、小中学校での訓練を定期的に行っており、地震や火災の対策として重要な訓練となっている。また、ある一定の規模以上の事業所等も消火訓練や避難訓練等を定期的に実施しており、こうした訓練がいざという時に役に立つものと思われる。

しかし、屋外で行う消火器による消火訓練では、最も多く設置される粉末消火器を使用するのが一般的だが、消火薬剤の飛散による周囲環境への配慮が欠かせず、水放射の訓練用消火器に替えても、使用感も違い緊迫感や迫力に欠け、思うような訓練が出来ないのが悩みである。

通常の防災訓練は発災から通報、初期消火、避難、そして消火器や煙等の体験が一連のお決まりの訓練となっており、マンネリ化がほとんどで単なるセレモニーで終わる、お膳立てしたストーリーで文字をなぞるだけ、失敗のない訓練を目指す、参加者はごく一部、防災意識が浸透しない、実施した事実に満足などが、現在の防災訓練の課題となっている。

今回視察したARの防災体験では、ARゴーグルを被ることで今いる場所に天井からCGで再現された煙が充満して来る様子が再現でき、その場に仮想の火災を発生させ、またそれをバーチャル上で消火できるものである。

しかし消火に手間取ると煙は降下を始め徐々に視界が効かなくなり、また火は更に燃え広がっていく。

実際にゴーグル状のヘッドマウントディスプレイを被ると、今いるその場のゴミ箱や調理機から火災が発生し、身体の動きに合わせた360度の立体映像を見ることが出来る。手に持った消火器(コントローラー)による消火活動が可能で、失敗すれば火災は拡大してしまう。天井面に発生した白煙が設定された時間経過と共に徐々に降下し黒煙に変わり、床面から80cmの高さまで煙が対流して煙層と空気層との境目が確認でき、避難の体勢や時期を学ぶことが出来る。煙の拡散する速度は意外と早く階段など上に昇る速さは1秒で3~5段で横には0.3~0.8秒であり、こうしたことも同時に体験できるものである。普段見えていたはずの出入り口や誘導灯の表示が見えなくなり、想像以上に見通しが効かない状況は思わず身を低くしてしまうほどの臨場感である。コロナ禍で少人数でも自分の体で体験して感じる訓練は極めて貴重であると思った。

ARを使用する事で、時間と場所を選ばず手軽に出来、参加者同士の密集が無い、また消火剤は映像なので環境問題も無く、ゴーグルによる臨場感ある体験ができ、モニター映像で危機感の共有も可能である。こうしたことから、網走でも学校や地域などでの防災教育に役立つものだと考えます。

② 北海道議会議場見学、油流出事故意見書について各会派へのご挨拶

議場は演台を中心に、馬蹄形となっています。この形は全国47都道府県議会中でも唯一の形態だそうです。議場内は車いすの利用を考慮し、演台まで段差無しで往復が出来るようになっています。

特徴1：バリアフリー

誰にでも使いやすく分かりやすい施設となるよう、多目的トイレや手すりの設置、段差解消などの一般的な対策の他、議員席や傍聴席も車いすで利用できます。

特徴2：地域資源の活用

道民ホールや議場、傍聴者ロビーなどに特徴的な道産材料を使用し、北海道の魅力や地域資源を発信している。

特徴3：省エネ性能

省エネルギー技術を採用するとともに、太陽光発電や井水利用といった新エネルギー技術を導入している。同規模の標準的な建物に比べて、エネルギー消費量を約50%削減している。

網走市も令和6年完成予定の新庁舎建設に向けて、有意義な視察となりました。

併せて、道議会各会派の方々に油流出事故の状況を説明し、課題の解決に向けた対応のお願いをしてきました。

秋田県横手市

地域公共交通等について

秋田県横手市は、平成17年10月に1市5町2村が合併し現在の横手市となる。

面積が692.80K㎡あり、これは東京23区を合わせた面積よりも広い。人口85,555人、世帯数31,109世帯、(高齢者33,401人と高齢化率39.4%)自動車保有台数75,377台(市民1.13人に1台、1世帯あたり2.42台)

網走と同様に、広大な土地の移動に自家用車は欠かせず、人口減少・少子高齢化を背景にバス等利用者の減少に伴う路線の赤字と廃止、運転手等

の働き手不足、高齢者の交通弱者の孤立などの課題が顕在化。

(1) 共助運営体ミニバン運行について

羽後交通路線バス「上畑線」の廃止から、代替交通（乗合バス）を同交通会社に委託し運行も、その後5年間で利用者が2/3まで減少。

H29.10月、市が「自家用車有償旅客運送」の登録を取得。

「共助運営体」に「自家用車有償旅客運送」を委託し、ミニバン運行を試行。

* 共助運営体とは…地域の課題解決にあたって、安心して住み続けられる地域づくりの推進を図ることを目的に地域住民が主体となり自治会や集落代表者等で構成された組織

車両はトヨタ社の協力を得、エスクアエアを実証実験期間中無料貸与。

実証実験結果、継続希望の声も増え、「乗り合いバス」を廃止し、共同運営体委託とした「自家用車有償旅客運送」1本化とした。

運営体制として、運転手登録者は9名、メイン稼働は4名でありほぼ曜日で固定。車両は車庫が無く会長宅付近に青空駐車状態であり、ほとんどの事務局業務・会計を会長が行い、定員を超える乗車が見込まれる場合も会長が連絡を受け、会長の車がヘルプ便として追走。

車両は公用車を無償貸与し、ガソリン代・車検・点検費、タイヤ等の消耗品は市が負担としている。

課題として、担い手不足と高齢化が最大の課題であり、保管場所の確保や車両メンテナンス、横展開の難しさ（強力なリーダーシップ無しには進まない。）などがあげられる。

横手市の公共交通が抱える課題

公共交通利用者の減少→事業者の経営状況悪化→公共交通サービスの低下
⇒交通空白地域の拡大

市民は…バス本数が少なくバス停も遠い→利用したい時に利用出来ない。
タクシーは料金が高く度々は利用できない。

行政は…公共交通の維持が困難

料金収入の低下により行政負担額が増加

(2) デマンド交通・循環バスの取り組み（H24年4月～H25年9月）

デマンド交通実証実験実施

- ・誰でも乗れる、一人でも複数でも乗れる
- ・タクシー車両20台
- ・予算 2,000万円、予約センター無し

- ・運行費用はタクシー料金（メーター料金と利用料金の差額を市が補填）
- ・中心部バスゾーンは運行不可（既存バスとの競合を避ける）
実証実験結果を踏まえ H25 年 10 月から本格運行開始

事業費については、運行経費に対し、実証実験時は 62.7%であった市の負担割合が、国庫補助金（地域公共交通確保維持改善事業費補助金）を活用する事により、本格運行開始以降は 44.2%となっている。

中心市街地はバス路線が多く走っており、競合を防ぐためデマンドの運行不可ゾーンを設け、市街地中心部を循環する循環バスは、公共施設・病院・商業施設など市民のニーズに合わせてバス停を設置。

デマンド交通の課題として

PR 方法の工夫、乗ってもらうための工夫が必要。

デマンド利用が増えれば、市の負担が増大する。負担割合の許容範囲、一人利用が多い現状をどう改善していくか

市の地理的条件・利用形態に適しているのか、集中管理システム導入の検討。

今の形のデマンド交通を維持しつつ、今後どのような形態が望ましいか検討を続けている。

山形県天童市

人口 62,140 人、世帯数 22,589 世帯、面積 113K m²。将棋と果物の町である。

(1) ふるさと納税の取り組みについて

H25 年度まで返礼品なし。26 年度から返礼品取り扱いを開始し、H27 年度 32 億 2 千万の寄付があったことより、ふるさと納税推進室を H28 年より発足、28 年度は 33 億 5 千万の寄付を集めた。

H29 年 9/1 寄附分より返礼品割合 30%となり、次年度より 1 億 9 千万円台となったが、R3 年度は巣ごもり需要の増大から 3 億 1 千万円台となった。

申し込み受付から特産品の発注、寄附の採納、入金処理、証明書の発行等、外部委託はせず、すべて直営で実施している。職員は 4 名、会計年度 4 名の計 8 名で行っている。

ふるさと納税を行う市側のメリットとして、税収の増加・地場産業の

振興・市の認知度の向上、ファンの獲得があげられ、この中でも、ふるさと納税を通じた天童ファンを多く獲得することで、天童市への観光等で来られる方を増やしていくという、いわゆる交流人口の拡大が今後さらに重要になっていくと思われる。

寄附申し込み詳細については、ふるさとチョイスが71%、楽天が27%であり、リピーター獲得のため、きめ細やかな対応を心がけている。例として、サクランボ、桃といった痛みが早い果実を送る場合、事前に不在の確認メールを送り、1回で受け取ってもらえるよう心掛けている。また、問い合わせメールやクレームについては、出来るだけ早く対応し、今後の寄附につながるように配慮している。

新しい返礼品の開発については、契約事業所が提案することとなっているが、どのように市側から誘導するかが今後の課題である。

なお、原則として、市民に広く知れ渡っていることが特産品であることから、簡単に新しく開発した品をすぐに返礼品として取り扱うことは出来ない状況である。

市のホームページについては自前で更新。ふるさとチョイスは自前で編集作業を行っている。楽天の返礼品掲載については外部委託。

職員の皆さんの努力と更なるスキルアップに取り組む姿勢に感銘を受けました。

同時にふるさと納税の税収は、単年度に使い切る仕組みだという事に驚きました。

(2) 天童木工の視察

1940（昭和15）年、戦時中に弾薬箱や軍需品の製造から誕生。終戦を迎え手持ち材料で家具づくりの1歩を踏み出し、1947（昭和22）年、成形合板と出会い転機となる。

成形合板は、1ミリ前後の薄い板を重ね合わせて型に入れ、圧力と熱を加えることで、無垢材では表現できない自由な曲面を生み出す。

この特徴は剣持勇や柳宗理、ブルーノ・マットソンといった著名デザイナーたちのクリエイティビティを刺激。妥協を許さない彼らデザイナーたちとのコラボレーションは、同時に天童木工に宿る職人氣質を刺激しました。日本を代表する建築家やデザイナーとの仕事を通じ丈夫で美しい木製の家具が、人々の心をときめかせ、暮らしを豊かに出来ることを知り、さらに成形合板技術を磨き続けながら、複雑な曲面を美しく仕上げる「3次元プレス成型」や、これまで家具に不向きとされていたスギやヒノキから丈夫で美しい家具を生み出す「ロールプレスウッド」難

焼性や耐候性、防腐・防蟻性といった様々な機能を木材に付加する「圧密浸漬処理」など、新技術の開発にも積極的に取り組んできた。

木材の可能性を引き出し、新たな価値を生み出す。それは80年前の創業当初から家具づくりを通じて木と真剣に向き合ってきた天童木工の使命だそうです。

斬新な発想や生活様式の変化、価値観の多様化に対し、素材の追求と職人の技術でこれからも挑戦し続ける天童木工の理念に、感激いたしました。

東京都庁を始めする、全国約800か所の議場に製品を納めている実績もあるそうで、網走庁舎建て替えに向け、素晴らしい視察となりました。

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会
副委員長 山田 庫司郎

コロナにより久しぶりの視察となりましたが、視察先の皆さんにご理解を頂き3泊4日の日程で、札幌市、横手市、天童市を視察させて頂きました。

(1日目)

札幌市の(株)日本防災技術センターで、AR(拡張現実)による体験をさせて頂きました。

従来の火災訓練は、マンネリ化しておりセレモニーになって居る傾向が強く、なかなか防災意識が浸透していないのではないか?

今回のAR体験は、火や煙を身近に感じ危機回避の行動を体験することが出来、火災の脅威を身近に感じる事が出来ました。

そして、その体験が何処にいても可能なことから、多くの自治体・消防・学校などで利用されているとのことでした。

1セット約40万とのことですので、まず消防関係者の方々に体験してもらうことが必要と思いました。

次に、新しく出来た道議会庁舎を見学させて頂き、その後道議会5会派の皆さんに網走市議会として知事宛に採択した意見書を持参し、「重油流出問題の早期解決」を要請してきました。

(2日目)

秋田県横手市を地域公共交通の取り組みについて、視察させて頂きました。

横手市は、平成17年に1市7町村の合併により、新たにスタートをした自治体です。

合併により、行政面積が692.80kmと東京都23区より広い面積となり、路線バスの廃止など住民の足を守る事業の展開が求められました。

横手市は3事業を中心に事業を実施しています。

1)ミニバン運行事業(自家用有償旅客運送)は、車両を無償貸与し運転を地域の登録した運転手に委託、車両はトヨタ自動車を提供し、地域が運営体を担っている。

ただ、担い手不足と高齢化そして車両の保管場所など長続きするための

課題はある。

2) デマンド交通事業は、タクシーを利用しバスより高くタクシーより安いを基本にメーター料金と利用料金の差額を市が負担する事業。

この事業では、利用すればするほど市の負担は増える、乗り合い率をどう増やすかが大きな課題である。

3) 循環バス事業は、病院・公共施設・大型店舗などへの足として事業展開している。

この3事業を地域の特性などを勘案し、それぞれが補うように事業が展開されています。

横手市がこれから目指す公共交通とは、ICT技術の進展を期待しながら持続可能な交通体系を次期地域公共交通計画策定の中で検討していく。

同時に道路のメンテナンス（除雪費訳 23 億円も含め）の課題も大きな問題として考えていました。

(3 日目)

友好都市である天童市の「ふるさと納税事業」について視察させていただきました。

天童市は、納税総額約 32 億円（R3 実績）と多額の寄附を頂いています。

「ふるさとチョイス」「楽天」の2社と市の特設サイトを利用し、送料は市の負担、8名の職員で苦情処理も含め対応している。

この事業により、寄附額を増やすことばかりでなく、天童市を知ってもらい観光も含め「長い付き合い」をモットーに事業展開している。

また、寄附のメニューや一人当たりの単価、地域別など統計を取りながらの対応がされている。

ちなみに、メニューで多いのは、子供の育成・景観保全であり地域別では、関東・近畿で65%を占めている。

フルーツの生モノが多いことから、苦情処理は大変であるが誠意をもって対応することでつながりが出来る。

寄附をしてくれる相手が、非常に身近であり相手の顔が見えていることを強く感じました。

次に、天童木工を視察させて頂きました。

天童木工は、いろいろな技術を持った職人たちが集まり組合形式から立ち上がった会社であり、創業82年目を迎えています。

作業工程を見せていただきましたが、基本的に手作りであり、素晴らしい作業工程とチェックの厳しき、いわゆる匠の仕事であります。

特に合板技術（円形に木を剥く）は最先端を行っていますし、そのことにより継ぎ目の少ない製品が出来、丈夫で、デザインも素晴らしい家具と
なっていく。

網走市の新庁舎にも、地元の木材を使用した製品が使えないのか考えて
きたところでは。

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会

栗田 政男

札幌市 株式会社 日本防災技術センター

防災訓練の重要性は、どの地域でも積極的に取り組むこととして実施されています。特に高層ビル化した都市部では、火災による避難訓練は数多く取り組まれています。マンネリ化した形骸化したものになっている現状もあります。今回は AR 火災体験アプリでバーチャル技術を活用した訓練を体験してきました。特殊なスコープの装着により火災の疑似体験ができるシステムは、今後の防災訓練に大変有効なことと感じました。価格もかなり抑えてあり、当市の地域の防災訓練にも活用できるのではないかと考えています。

秋田県横手市 地域公共交通について

秋田県の南に位置する人口8万5千人の横手市は、平成17年に8市町村の合併により誕生した街です。合併した街は多くの自治区が点々と広がり、市役所の役割も広域化して大変そうでした。

今回は交通弱者対策として共助運営体ミニバン運行とデマンド交通について調査しました。ミニバン運行は集合バス(路線バス)の利用者減少により小型のワゴン車を地域の共助体により運営していくシステムに移行した事例でした。民間の人達の努力により支えられている事業であるが、担い手不足・高齢化など議題も多いことを知りました。行政がしっかりとサポートできれば有益な事業に感じました。

デマンドバス運行は決まった路線を利用者の予約により運行するシステムで、買い物難民対策としては有効だと感じました。合併市らしく小規模のタクシー会社の協力により運営されていることも特徴的でした。網走市のどこバス事業と色々な意味で対比させながら考えていく必要があるものと感じました。

山形県天童市 ふるさと納税システム

友好のある天童市は、ふるさと納税で成功している要因について調査しま

した。地域の特産物を返礼品として活用していることはどの地域も同じですが、市の体制が他の地域とは違いほぼ専従のチーム(4人)と自前で運営していることが成功の秘訣だと感じました。

つまり、ほとんどの自治体は外部委託による運営が一般的ですが、ふるさと納税を通して天童市をPRし、観光客の獲得も視野に入っていること、配送まで細やかなサービス・クレーム処理もすべて行政が窓口となって行っていることなど、熱意が当市とは違うと思いました。商売としてこの制度を考えると天童市のような対応になるものと考えられます。国がいつまで継続するかわかりませんが、地域にとって早い時期の改善が必要だと痛感しました。北海道でも同じ商品を扱いながら大成功している例もあり、早急に調査して当市の財源確保の一助になるよう提言したいと思いました。

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会
立崎 聡一

札幌市 (株)日本防災技術センター

AR(仮想現実)を用いた避難訓練

・今いる部屋にバーチャルで煙を発生させ、火災を消す体験ができるというものです

同席している人もスクリーンに同じ体験画像が映し出されるので、同時に体験を共有。

マンネリ化する避難訓練をARを活用し訓練にすることで、実際の火災、浸水に活かすことが出来る。

秋田県横手市 地域公共交通、共助運営隊ミニバン運行、横手デマンド交通

・横手市は17年前に1市5町2村が合併。広大な地域とそこに点在する可住区域、少子高齢化と人口が年間1,000人も減り続け「人口減少のトップランナー」と言われるほど

地域共同体が運営する「ミニバン運行」、タクシーを活用した予約乗合型デマンド交通、路線バス、巡回バス、スクールバスの活用などあらゆる手段を取組んでいました。

今後も費用の増加等課題はありますが、より良い方向性を目指しているのが印象的でした。

山形県天童市 ふるさと納税の取り組みについて

天童市はサクランボ佐藤錦をはじめ、桃や葡萄、ラ・フランス、リンゴなどの果物、将棋の駒の生産地としても有名で返礼品の数は636品目、昨年の寄付額は約32億円

「ふるさと納税推進室」が直接、受付から発注、入金処理まで外部委託なしで全て直営でやっている。受付窓口は「ふるさとチョイス」と「楽天」の他に市独自の特設サイトを持っている。寄付金は単年度で使い切ってしまう。

寄付金を単年度で使い切るのには驚きました。また、リピーターが多いとのことでした。これは、返礼品のクレーム対応がきちんとしているからだと思います。

まとめ

どの視察地も網走に必要、取り入れていく、参考になる取組と考えます。
他市の動向も見ながら網走にとってより良い方法を考えて行きたい。

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会

永本 浩子

1, ARによる防災訓練について

<視察日> 令和4年10月18日(火)

<視察先> (株)日本防災技術センター (札幌市)

<視察内容> 防災訓練は小中学校や各地域、企業等で市や消防等が中心となり、年に1回程度行っているのが定番であるが、火災の発見→消防への通報→館内放送→避難誘導というシナリオに基づいた訓練や消火器を用いての消火訓練などが多くマンネリ化が指摘されている。そんな中で、ARを活用した新しい防災体験が出来ることを知り、札幌市の(株)日本防災技術センターを視察した。

AR (Augmented Reality) とは、「拡張現実」と訳され、今いる現実空間の映像にCGを重ねて表現する技術で、現実とかけ離れた「仮想空間」を見せるVR (Virtual Reality) とは根本的に違うものである。具体的には、火災煙体験アプリがインストールされたARゴーグルを被ることで、いつも使っている事務室や居室、教室等で実際に火災が起きた状況をリアルに体験できるというもの。しかも、ゴーグルを装着した人が見ている映像をその場にいる人たちもモニターで一緒に見られるため、煙が広がっていく様子や火災の発生、消火の様子を全員で共有することが出来る。実際に私もゴーグルを装着し体験させてもらったが、煙が充満する速度が思った以上に早く、視界が遮られるためドアの方向が見えなくなり、下に降りてくる煙を吸わないように床を這うようにしないと動けないなど、実際の避難の大変さを実感することが出来た。また、同じ部屋で火災が発生し消火する体験もでき、別の議員は給湯室のガスコンロで火災が発生し、初期消火

に失敗して火が燃え広がる、という設定の体験もできた。

AR ゴーグルを装着しての体験の前には、防災技術センターが開発した、テントの中に煙を充満させる装置や空気を入れた消火器での消化体験もさせて頂いた。また、地下駐車場では、スプリンクラーが実際に放水する様子を見せて頂いた。中でも、地下通路などで火災が起きた時に防火扉の役目を果たす「水の壁」を作る特殊なスプリンクラーの放水を見るのは初めてだったが、その迫力に圧倒された。

<感想> 防災訓練は、実際に災害に遭った時に命を守るための役に立たなければやる意味がない。しかし、防災訓練のマンネリ化と緊張感の欠如は大きな課題であると思う。加えて、コロナ禍による三密の回避を考えると出来る訓練も限られてくる。そんな中で、この AR ゴーグルを活用した防災訓練は画期的なものだと思う。実際にゴーグルを付けて体験してみると、あっという間に煙が広がり、どんどん下がってくるので、その速さにビックリ！これまでの訓練では感じられないリアリティ溢れる体験は大変貴重なものだった。普段居る場所で火災が起きるとどうなるか、をリアルに体験出来るのは、防災意識の向上に大変有効であると感じた。

また、大人数を集めることもなく、消火剤の後始末もいらない。発煙装置やテントなどの設置の必要もない。いつも利用している事務所や教室など現実の空間で実際の火災発生等のリアルな体験ができる。年に一度のセレモニー的な訓練ではなく、教育の一貫として年間を通して一クラスずつゴーグルを回して体験できるようにしていけば、より良い防災教育になるのではないか。

AR ゴーグルは 1 台約 35 万円、市で何台か購入して貸し出し出来れば、学校でも地域でも高齢者施設や企業でもどこでもリアルな疑似体験が出来る。当市においてもこうした活用が出来るよう、是非、提案していきたいと思う。

また、火災だけでなく浸水体験はすでに開発されており、今後、山崩れや津波などを AR 体験システムに入れ込むことが考えられている、ということで、今後の取り組みにも大いに期待したい。

2. 北海道議会議事堂

＜視察日＞ 令和4年10月18日（火） ＜視察先＞ 北海道議会議事堂

＜視察内容＞ 防災技術センターの視察後に、2020年5月に新装なった北海道議会議事堂を見学した。終了後には、「重油流出事故発生に関する意見書」を持って、道議会各会派を回り、ご協力をお願いした。

＜感想＞ 北海道議会事務局の吉田憲人守衛長が楽しく丁寧に、館内を隈なく案内してくださり、感謝に堪えない。当市も新庁舎建設に向けて取り組んでいる最中ではあるが、あまりの豪華さに圧倒された。議場はふんだんに道産木材を使用し、場内に木の香りが溢れており、議員と理事者が向かい合うのではなく横並びになる「馬蹄形」の座席は全国47都道府県議会中、唯一の形態で非常に特徴的だった。また、傍聴席は一般の傍聴席の他に子ども連れでも傍聴でき、子どもが泣いても大丈夫なように防音仕様になっている「親子席」や車いすでも入れる「車椅子用席」、聴覚障害の方用の専用の補聴器が使える「フラットループ」を備えた席などがある。更に、車いすを使用する議員のために、質問席に向かう道はスロープになっており、なんと、演壇そのものが上下に高さを変えられる、という画期的な作りで、その配慮の深さには感銘した。また、委員会室などに使用されている椅子は既製品が多く、さほど高価ではないが座りやすい。当市の新庁舎にも、こうした既製品の活用を大いに検討すべきだと思う。最上階の傍聴者ロビーは展望ロビーとして一般開放されており、展望窓からは、遥かに大倉山ジャンプ場も見え、四季折々の景観を楽しむことが出来る。1階の道民ホールや議会図書室も誰もが利用でき、市民・道民に愛される

工夫が随所に見られ、大切なことだと感じた。

3、横手市の公共交通について

＜視察日＞ 令和4年10月19日（水） ＜視察先＞ 秋田県横手市

＜視察内容＞ 横手市は17年前の平成17年10月に1市5町2村が合併して現在の「横手市」になった。面積は692.80㎢で網走市の約1.5倍、人口は85,253人で網走市の約2.5倍、合併により可住面積は増えたが点在しており、高齢化率は39.56%、人口が年間1,000人も減り続け「人口減少のトップランナー」と言われるほど！そのためバスのドライバーが不足してバスを走らせられない等、課題は山積している。加えて、高齢者の免許返納により、公共交通はより一層重要になっている。

今回の視察では、横手市が行っている「共助運営体ミニバン運行」についてと「横手デマンド交通」の2点を中心に視察を行った。

○共助運営体ミニバン運行について

平成20年9月30日に羽後交通バス路線「上畑線」が廃線になったことから、横手市が羽後交通に委託して代替交通（乗合バス）上畑線の運行をスタートした。しかし、乗合バスの利用者は減少する一方で、H29には一人当たりの費用が5,640円にまで増大したため、H29.10市が自家用有償旅客運送の登録を取得し、H29.11からH30.9まで狙半内（さるはんない）共助運営体とトヨタ自動車によるミニバン運行の実証実験に取り組んだ。検証の結果、利用者数が増加し、継続を希望する声も増えたため、H30.10.1から本格運用がスタート、今日までミニバンを使った自家用有償旅客運送「上畑線」を継続している。

「狙半内共助運営体」は、地域の自治会長や集落の会長、老人クラブの会長、地域センター運営協議会の会長等の約40名で構成されており、地域の課題解決にあたって住民自身が主体者となって“共助活動”を実施

することで、安心して住み続けられる地域づくりを推進するために H24 に設立された。屋根の雪下ろしや沿道の草刈り等に取り組んできたが、H30 に本格運行した自家用有償旅客運送「上畑線」の運行も担っている。

月・火・水・木の週 4 日の運行で、一日 4 往復。登録運転士は現在 9 名。39 歳から 73 歳、そのうち女性は 1 名。メイン稼働は 4 名で、曜日ではほぼ固定。

市が共助体に委託して運営。委託料は 150～160 万円/年（全て一般財源）→運転者手当 6,000 円/日、事務委託料 20,000 円/月（会長が事務業務全てを実施）

車両は市の公用車を無償貸与。ガソリン代、車検・点検、タイヤ等消耗費→市が各業者に支払う。

利用料金は 3 区域に分けられ、中学生以上 200 円、400 円、700 円。小学生と中学生以上の障がい者はその半額、小学生の障がい者は 1/4。幼児は全て無料。

利用者数は人口減少、大雪、コロナ等で減っては来ているが、令和 3 年度の一人当たりの経費は 1,868 円。H29 の 5,640 円に比べると約 1/3 になっている。

課題としては、担い手不足、高齢化、強力なリーダーシップがないと横展開が難しい、などが挙げられる。

○横手デマンド交通について

バス事業者から路線廃止協議が相次ぐ中、H22 年度、「横手市地域公共交通総合連携計画」の策定にあたり、公共交通空白地帯解消のため「デマンド交通について実証実験を行い、導入の可否を検討する」ことが明記された。翌年から地域公共交通活性化協議会やタクシー会社 10 社が集う地域公共交通検討会、バス事業者個別協議など、様々な形で活発な議論が開始された。バス事業者やタクシー会社とも競合せず、かつ交通空白地帯を解

消し住民の利便性を高めるため、H24.4～H25.9まで、つぎのような実証実験を開始した

①利用者は1時間前までに任意のタクシー会社に直接電話で予約する。

②一人でも複数でもOK（学生も可、市外の人も可）

③朝7時から夕方6時まで（飲酒後は不可）

④料金は、タクシーより安くバスよりは高くなるよう設定

*一人乗車は距離制でデマンド料金（500円～4,000円）が設定。

*複数乗車はエリア料金制で旧市町村エリア内だと一人400円、エリアを超えると料金が加算。

*メーター料金と利用者が払うデマンド料金との差額を市が負担する。

⑤運行エリアは市内全域。しかし、中心部バスゾーンは運行不可。

⑥タクシー車両20台（1社2台×10社）

⑦予算2,000万円

実証実験の結果、運行日数419日で41,544回、53,444人が利用、1日平均運行回数は99.2回、1日平均乗車人数は127.6人だった。1台当たりの乗合率は24.3%、平均乗車人数は1.29人だった。

こうした結果を踏まえ、H25.10.1から本格運行を開始。同時にバス事業者の収益向上のため、中心部の病院等を回る循環バスを新たに運行、デマンドからの乗り換えや市街地の回遊性向上に取り組んでいる。

事業費については、「地域公共交通確保維持改善事業費補助金（地域内フィダー系統確保維持費国庫補助金）」の対象となったため、タクシー事業者の経常損益見込み額の1/2が国から支給され、H30年度下半期からは各タクシー事業者にメーター料金の1割を負担してもらい、市の負担割合は実証実験期間の62.7%から46.2%に減らすことが出来た。令和3年度の運行経費は6,631万1千円に対し、市の負担額は3,063万7千円だった。また、本格運行開始にあたっての事業費は、チラシ作成やデマンド車両マ

グネットシート作成、バス停案内表示作成等で約 167 万円かかり、その半分を国庫補助金で賄うことが出来たので、市の実質負担は 83 万 5,905 円だった。

課題としては、次の点が挙げられる。

- ① 必要な方への情報が届いているか
- ② 利用者が増えるほど市の負担も増えるため、持続可能か
- ③ 一人利用が多く、乗合率を上げるにはどうしたらいいのか
- ④ ICT 技術によるサービスの向上
- ⑤ バス、タクシー、JR 等との共存

<感想> 横手市は網走市と同じ神奈川県厚木市と友好都市であり、厚木市の「鮎祭り」で一緒になるなど、共通の話題が出て親しみやすい雰囲気です。また、モニター画面には横手市議会のマスコットキャラクター「しらとり議員」と共に網走市のご当地キャラ「ニポネ」ちゃんも映し出され、各議員の名前の裏には「ようこそ横手市へ！」とのメッセージ等、真心からの歓迎に感謝したい。

網走市も人口減少、高齢化、免許返納後の足の確保等、持続可能な公共交通の体制確立が喫緊の課題である。本市としては、現在、AI を使ったオンデマンドバス、通称「どこバス」の実証実験中であり、来年度からの本格運行に際して横手市の取組から多くのことを学びたい、との思いで視察に伺った。

地域の共助体による自家用有償旅客運送については、まず、地域住民の主体的な共同体が不可欠である。網走市の郊外地区でも免許返納後の高齢者の足となる交通手段が必要となっているが、「どこバス」を郊外地域にまで走らせるには採算が合わないため、このような共助体によるミニバン運行が出来れば有難いところである。しかし、狙半内地域のような強固な自治組織がないのが現状で、それよりはスクールバスの活用の方が現実的

かもしれない、と思った。今回は詳しい話を聞くことは出来なかったが、横手市でも令和 3 年度から一部地域でスクールバスを活用した自家用有償旅客運送を開始しており、是非参考にしたい。

また、タクシーを活用した「横手デマンド交通」は、網走市の「どこバス」と比べると「ドアツードア」で利用者にとっては大変便利で喜ばれていると思うが、市の負担額を考えるとなかなか難しいところである。ロシアのウクライナ侵攻でガソリン価格が高騰し、先行きが見えない現状では、負担は更に厳しくなるのではないかと思う。網走市としては、横手市の料金設定を参考にさせてもらいながら、「どこバス」が地域に定着し、市民の皆さまに喜んで使ってもらえるように取り組んでいきたい。

更に、横手市は積雪量が多く、1 m99 cmを超える特別豪雪地帯もあり、除雪する歩車道は 1,200 km、東京まで 600 kmなので、冬は毎日東京往復分を除雪しなくてはならない。例年の除雪費は 10 億円だが、去年は積雪量が多く、25 億円かかった、とのこと。その金額に驚いたが、やはり除雪人材の不足と高齢化が深刻な問題だと伺い、いずこも悩みは同じだと感慨深かった。

4、天童市のふるさと納税の取組について

<視察日> 令和 4 年 10 月 20 日（木） <視察先> 山形県天童市

<視察内容> 天童市は網走市の名誉市民である中川イセさんの出身地であり、そのご縁で友好都市になっている。冒頭、イセさんが寄贈した図書が今も「イセ文庫」として小学校に残っており、毎年、網走市で開催される七福神祭りには名物の「玉こん」を出店してくれていることなど、網走市との縁の深さを議長が語ってくださった。

天童市は、サクランボの佐藤錦をはじめ、桃やぶどう、ラ・フランス、リンゴなどのフルーツ王国。将棋の駒の生産地としても有名で、お米や蕎

麦、地酒、天童牛、天童木工の家具など、返礼品の数は 636 品目もあり、
昨年の寄附額は約 32 億円。返礼品の調達や送料、事務費等、約 50%が支
出で出ていくので、自主財源で使えるのは約 17 億円。用途は、「市長にお
まかせ」が最も多く 40.5%、次に子育て 20.7%、フルーツとまちの振興
等が 18.4%などとなっている。寄附の申し込みは東京、神奈川、大阪、愛
知など大都市圏が多く、返礼品の 85.4%がフルーツ。天候に大きく左右さ
れるためクレーム対応が本当に大変だが、丁寧に聞いて誠実に対応するこ
とで、リピーターが多い。

【網走市との大きな違い】

- ① 市の「ふるさと納税推進室」（職員 4 名、会計年度 4 名）が、受付か
ら発注、入金処理まで外部委託無し。全て直営でやっている。（網走市は
JTB に委託）
- ② 受付サイトは「ふるさとチョイス」と「楽天」の大手 2 社と市独自の
特設サイトも持っている。（網走市は 10 サイトで独自サイトは無し）
- ③ 寄附金は単年度で使い切ってしまう。（網走市は基金を作って運用）

【今後の課題】

ア、特産品としての基準の設定

イ、特産品の供給量の確保

ウ、クレーム時の対応

エ、本市の魅力とオリジナリティの確保

オ、天童市ファンの獲得と交流人口の拡大

カ、新規寄附者の獲得と富裕層などターゲットへのアプローチ

<感 想>

網走市もふるさと納税は、毎年堅調に寄附額が伸びており、令和 3 年度
は約 22 億 5 千万円。しかし、天童市と比べると 10 億円の差があり、北海
道内でも紋別市や根室市が 100 億円を超えているため、当市としても何と

か寄附額をアップさせたい、というのが本音である。今回、視察した天童市は外部委託をしないで直営でやっているため、クレーム対応が非常に大変だが、その分、寄附者の本音が分かり、生産者との結びつきも強い。クレームへの丁寧な対応を心掛けるところから、天童市は「リピーター」を増やすことに重きを置いており、とても大切な取り組みだと思った。また「ふるさとチョイス」と「楽天」では、客層が全く違う。「楽天」の顧客は買い物感覚の人が多く、クレーム率も高いが、「ふるさとチョイス」は、ふるさと納税の意味を分かっている人が多く「リピーター」も多い、とのこと。現に寄附者の71%が「ふるさとチョイス」、楽天は27%だ。市独自の特設サイトは0.6%とまだ少ないが、「ふるさとチョイス」のサイトも天童市が自前で編集作業を行っており、見せ方の工夫もしている。網走市も外部サイトに任せきりではなく、見せ方の研究も必要なのではないか、と思った。

私が最も驚いたのは、寄附金を単年度で使い切ってしまう、という点だ。網走市は「ふるさと基金」を創設して、医療、福祉、教育等寄附者の意向に沿って予算付けし、多くの事業を行うことが出来、大変に助かっているが、「単年度で使い切る！」という発想は全くなかった。どちらがいいかは何とも言えないが、寄附者に使い道の報告を明確にする、という点では大切なかもしれない。

また、ふるさと納税を通じて天童ファンを増やして観光等に来てくれる交流人口につなげたい、という思いは網走市も同じだが、天童市は「リピーター」の獲得、富裕層へのアプローチなど、直接関わっているからこそそのターゲットを絞った取り組みが出来るのではないかと、思った。当市もどこにターゲットを絞って取り組んでいくのか、今回の視察を今後に生かしていきたい。

5、(株) 天童木工 施設見学

<視察日> 令和4年10月20日 <視察先> (株) 天童木工

<視察内容> 天童市役所のあとは、(株) 天童木工を訪問し施設見学を行った。天童木工は昭和15年6月に創設され、創業82年の歴史の中で開発した成形合板の圧密加工技術は高く評価されており、全国800もの自治体の役所や議場等のテーブルや椅子等も手掛けている。また、これまで木質が柔らかいため不向きとされてきた針葉樹の加工技術の開発にも成功し、更なる挑戦を続けている様子を後藤健一営業部顧問が詳しく説明してくれた。展示ルームや工場内も見学させて頂いた。

<感想> まず、会社入口に展示されていた木製の車に思わず歓声があがった。また、地産地消にこだわり、注文があった地域の木材を取り寄せて加工、使う人の立場に立って、人の手を使って仕上げる丁寧な仕事、軽くて丈夫で長く使ってもらえるようにとメンテナンスにも力を入れる、その姿勢に感銘を受けた。実際に展示されていた椅子に座ってみたが、座り心地の良さにも感動！入口の車もそうだが、木製の自転車も展示されており、その遊び心に笑顔がこぼれた。こうした企業理念が100年企業へと成長させていくのだと思った。

網走市も今、新庁舎の建設がスタートしたところだが、是非、友好都市でもある天童市の天童木工さんの家具を取り入れることが出来れば、と思う。

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会
平賀 貴幸

行政視察実施期間 令和4年10月18日から10月21日まで
行政視察実施先 ①札幌市(株)日本防災技術センター及び北海道議会
②岩手県横手市
③山形県天童市及び(株)天童木工

①-1 AR技術を活用した防災訓練の強化について

札幌市にある(株)日本防災技術センターに伺い、AR(仮想現実)を用いた避難訓練についてレクチャーを受け、数名の議員が実際に体験をさせていただく機会を得ました。

専用のゴーグルを装着すると、今いる部屋にバーチャルで煙を発生させることができるもので、火災の消火体験及び煙の影響を実際に感じながらの避難訓練が実施できるものです。

スクリーンで装着者の見ている映像と同じ画面を見ることができ、同時に複数名による体験も可能な仕組みになっています。

実際に、今いる建物の環境を利用しながらAR技術による火災体験、消火体験、避難体験ができることもあり、急速な煙の広がりにより視界不良がどのように起こるのか、その際、床面を這うような形で避難しないと視界が効かなくなることがリアルに感じられる内容となっています。

VR技術を活用するため、これまでの避難訓練や消火体験とは異なり、リアルに近い体験ができるため、効果も高まると感じたところです。

導入価格も比較的現実的であることから、自治体で複数台導入したうえで学校や地域での避難訓練・防災訓練に貸し出しながら効果的な訓練を進めることができると感じたところでした。

同社はスプリンクラーの技術も優れており、北海道で唯一の見学施設も駐車場に設置しており、その稼働状況も見せていただきました。

貴重な体験を通じて見識を深めることができました。

①-2 北海道議会棟の視察及び各会派を回っての要請活動

北海道議会においては担当職員の方から説明を受けながら各フロアの構造を視察させていただきました。議場や委員会室においては動線の設定の考え方や、実際の運用面での考え方などを詳細に伺い、網走市における新たな議会関連設備についての見識を深めることができました。

また、地下構造を詳細に見せていただく機会をいただき、免震構造についても見識を得ることができました。

その後は、網走市における重油漏れ事故の北海道の対応について更なる取り組みを求めることを目的とし、道議会各会派を網走市選出の佐藤しんや道議に案内をいただきながら周りながら協力を求めました。

各会派で熱心に道議会議員の皆さまに網走市の現状を聴いていただき、ご理解を頂けたと思いますので、引き続き事態の解決に向けて私たちも一丸となって取り組んでいく決意を新たにしましたところではあります。

②秋田県横手市 地域公共共通について

市町村合併で網走市を超える行政面積を有することになった秋田県横手市では、旧自治体間の距離や高齢化などが原因となって地域に置ける交通に課題が生じており、網走市にも同様の問題があることから今回の行政視察で学ばせていただきました。

「共助組織による自家用有償旅客運送」については、もともと地元の羽後交通が維持していた「上畑線」が平成 20 年に廃止されたことに伴い、同年から乗合バスを同社への委託形式で平成 30 年まで運行されていました。

その後、平成 29 年に横手市が自家用有償旅客運送の登録を行い、「共助体によるミニバン運行」をトヨタ自動車から車両の提供を受けるなどの協力を得ながら平成 30 年 9 月まで実証実験を行っています。

同年の 10 月からは共助体による運行継続希望があったことから、自家用有償旅客運送として本格運行し現在に至っています。

運行上の課題としては①高齢化に伴う人口減少が乗降客数の減少に繋がっていること。②運行の担い手が高齢化しており運航継続が危ぶまれる可能性があることなどがあげられており、強力なリーダーシップなしには進まないことから、他地域での同様の展開はなかなか難しい状況にあることがわかりました。

北海道においては福祉有償運送の実施が複数の自治体で見られるものの、自家用有償運送による実施は一部自治体にとどまっていますが、同様の課題があることが改めて認識されました。

次に地域公共交通については、既存のバス路線の隙間を埋める形でデマンド交通を導入している実態があることが説明を受けて理解できました。

導入に向けた当初は交通不便地域から幹線バス停までの交通手段として検討されていたものが、不便地域ではない場合でもバス路線とは違う方向への移動などの需要もあることから、幹線への接続という視点はもちつつ、エリア内をある程度移動できるデマンド交通を検討したほうが利便性が高まるということから現在の形になっています。

横手市の場合、タクシーをデマンド交通として利用する方式をとってお

り、網走市における「どこバス」の方式とは違いがあります。「タクシー料金より安くバス料金より高い」という料金設定もあり、運行コストは実証実験当初の平成24年4月～25年9月末で2000万円、平成25年からの本格事業実施後も①PRは必要な方に行き届いているか ②行政費用の負担が増大する傾向にあり、負担割合の許容範囲を適正な行政負担水準からみてどう定めるか③乗合率が低く、1人での利用が多い現状の改善などが課題として挙げられています。

免許返納サポートの取り組みも網走市と同様の事業が行われており、今のデマンド交通を維持しつつ、今後どのような形態が望ましいか令和6年度から次期地域公共交通計画の策定でさらに検討していくとのことでした。

ICTの導入は網走市と違って行われていない状況であることから、隣接地域や他市の取り組みも参考にしながら導入も視野に入れられるようでした。

公共交通の課題は地域によって差異はありますが、共通項も多いことから引き続きコミュニケーションを図りながら対策を共有する必要があると感じたところです。

③-1 山形県天童市 ふるさと納税の取り組みについて

友好都市である天童市では「ふるさと納税推進室」を設置しており、ふるさと納税の申込受付、特産品の発注、寄付の採納、入金処理、証明書の発行を外部委託を行わず、職員4名、会計年度職員4名の体制で実施しており、令和3年度の寄付は31億8288万6千円で、今年度も前年並みを見込んでいるとのことでした。

寄付の受付は①ふるさとチョイスが71.1%と最も多く、②楽天が27.0%③市特設サイトが0.6%④紙申込等が1.3%となっています。

ふるさと寄付のサイトを増やすと経費負けすることからサイトは2社に制限しており、網走市がどのようになっているか確認する必要があると感じたところです。

返礼品は43事業所636アイテムを現在そろえており、返礼品の申込状況はフルーツが85.4%、米が11.2%、加工品が2.9%となっているとのことでした。

天童市では「市民が広く知り、購入できるもの」を特産品と位置付け、生産者の支援を通じて市の認知度と好感度の向上を図ることを目標に取り組んでおり、フルーツなど期間限定の特産品は天候などによる影響を受けることから供給量の確保や通年供給できる魅力的な特産品の確保が天童市のオリジナリティの確保と併せて課題となっていることがわかりました。

直接、寄付者と接点を持つ対応をしていることから、クレーム対応に追

われる時期もありますが、リピーターの確保や地域の事業者とのコミュニケーションが図られている状況も感じることができました。

網走市においては担当する職員数が少ないことから、対応の多くを事業者に任せていることや多数のふるさと納税サイトと連携していることなどの違いがあることが改めて分かります。

やはり担当職員の増員は不可避であり、費用対効果の面でも増えてふるさと納税サイトをそのまま維持すべきかどうかも含めて検討をする余地が網走市においてはあることが浮き彫りとなりました。

網走市においては年々ふるさと納税は増加している傾向にありますが、紋別市などをはじめ、網走市と似た環境の自治体が大きな額のふるさと納税を頂いている状況を踏まえ、更なる調査を進めることで寄付額の増加による地域産業の活性化を進めるべく、取り組まなければならないと感じました。

③-2 株式会社天童木工での視察

天童木工はもともと、職人の寄り合いから会社化したこともあって、その気質が今も生きている伝統工芸を未来へと紡いでいく企業です。

特許も取得している合板技術は他社の追従を許さないものであり、軽量で丈夫な素材をまげて加工する合板家具においては国内最高の技術と実績を持っています。

今回、その技術について詳細にレクチャーをいただいたうえで、製品を見せていただくのはもちろん、製造工程も見学しながら説明を受ける機会を得ました。通常の木工所と違い、工場内が大変きれいな状態で作業が行われていることも注目の1つであり、実際に機械で薄くカットした木材を合板に仕上げる工程は、他社では見られないものでした。

特に針葉樹を使った合板技術による家具の作成ができることから、網走産の松などの針葉樹を使った家具の作成が可能であることが分かったのは大きな収穫の1つだと考えています。

同社は、全国で800以上の議場の設計や家具の設置を手掛けており、網走市においても今後50年以上使用することになる議場の家具を、友好都市でもある天童市においては伐期を迎えた網走市の市有林の木材を使用してつくることも十分可能であることがわかりました。

今後、どのようになるかはわかりませんが、道山材の活用はもちろん必要ですし、網走産の木材の活用も必要となることから、引き続き同社とは連絡を取りながら新庁舎の建設に当たっても検討していく必要があると感じたところです。

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会

古田 純也

行政視察日程（10/18～10/21）

10/18：札幌市

10/19：横手市（秋田県）

10/20：天童市（山形県）

①【AR技術による新訓練の取組みについて】札幌市

(株)日本防災技術センター

通常おこなわれている防災訓練は、発災から通報、初期消火、避難がお決まりで、参加者からは緊張感がかけていたり、訓練が義務のように行われているところが多い。

そこで、バーチャル技術を活用して、現実の空間でこの先起こる災害を疑似体験できる技術が開発され、消防署、自治体、学校等の防災訓練で活用されているようです

【感想評価】

実際に体験しましたが、火災後の部屋に広がる煙の速さや、炎の勢いを現実空間で体験できるので、緊張感をもって訓練ができました。

小中学校では授業の一環としてクラスごとに緊張感をもった訓練も出来るし、高齢者向けとしても十分に活用できる火災煙体験アプリだし、バーチャル体験セットは1台35万円位なので市でも何台か購入して、各地区に貸出して訓練を実施すれば、さらに市民の防災意識向上に繋がると感じました。

②【地域公共交通活性化事業について】秋田県横手市

平成17年10月に1市5町2村が合併し、現在の横手市に。

人口は85,555人で65歳以上の高齢者が33,401人（高齢化率39.04%）

H19からH24頃、バス事業者から路線廃止協議が相次いでいた頃、H22年度に『横手市地域公共交通総合連携計画』が策定され、持続可能な公共交通システムの構築が目標として掲げられ、公共交通空白地帯の解消

のため、新しい交通システムも視野に入れデマンド交通について実証実験を行い検討されてきた

具体的な実証実験の中身

料金設定はタクシーより安く、バスより高くなるような設定にするべきという観点から

※1人乗車の場合は距離制

※乗合の場合はエリア制（エリアを越えると料金が加算）

※運行エリアは市内全域に設定

※利用者は1時間前までに、任意のタクシー会社を選んで直接電話予約

※運行時間は朝7時から夕方6時まで

実証実験の結果

デマンド交通に期待する事

- 利用料金の安さ
- 利用したい時に利用できる
- 自宅まで送迎

循環バスが通ってほしい場所

- 病院
- 買い物のできるスーパー
- 市役所、金融機関など

【感想評価】

人口減少や高齢化で地方では公共交通の利用率低下が問題となっている利用者が空いている時間に上手く循環バスとして活用する取組みは勉強になりました。

横手市では10社のタクシー会社（1社2台）が運行を担当し共助体制が整っていましたが、運行経費の市の負担割合も46.2%と算出され適正な行政負担水準はいくらなのか気になりました。

網走市では『どこバス』オンデマンド交通が実証実験を踏まえて順調な運行を続けています。料金設定は課題ではあるが、横手市さんのように市内全域を運行できるように行政に働きかけたいと感じました。

③【ふるさと納税の取組みについて】山形県天童市

人口62,140人

特産品は、将棋駒、果物（サクランボ、モモ、ブドウ、ラ・フランス、リンゴ）そば、地酒、天童牛、天童木工

平成25年のふるさと納税寄付受付件数が5件から始まり、8年後の令和3年度は寄付受付件数が209,281件、寄付金額が31億円（網走の3倍）まで伸ばした実績があり、いまだに全国から寄付が集まる街です。組織の体制として、総務部の中に『ふるさと納税推進室』を設置して職員4名、会計年度4名で申込受付、特産品の発注、寄附の採納、入金処理、証明書の発行を行っております。

寄附受付窓口割合は全体の71.1%をふるさとチョイスが占め、次に楽天が27%、のこりが市特設サイト0.6%その他（紙申込）1.3%です。

寄附者の1人あたりの単価は令和3年度で15,214円で、返礼品の申込状況はフルーツ85.4%、米11.2%、加工品2.9%。

フルーツの詳細は、桃30.4%、さくらんぼ29.0%、フルーツ詰合せ17.2%、ぶどう4.5%となっています。

質問）ふるさと納税システムの最も重要な部分についてお伺いします。

回答）税収の増加、地場産業の振興、市の認知度の向上、ファンの獲得
この中でふるさと納税を通じた天童ファンを多く獲得することで、天童市への観光等で来られる方を増やしていくという、いわゆる交流人口の拡大が今後さらに重要になっていくと思われま

質問）ふるさと納税増加の為の取組みについてお伺いします。

回答）広告はふるさとチョイス等で行っている。リピーターの獲得のため、きめ細かな対応を心掛けている。例えば痛みが早い果物を送る場合、事前に不在の確認メールを送り一回で受け取ってもらえるように心掛けている。

問い合わせメールやクレーム対応はできるだけ早く対応し、今後の寄附につながるように配慮している。

【感想評価】

網走市と組織体制の違いを感じました。天童市さんは人員の配置の数が多いぶん迅速なクレーム対応が素早くでき、結果リピーターを増やしている。純粋に天童市を応援したいと思うお客さんを増やすことが、毎年の継続納税に繋がる事だと感じました。網走市も海産物の魅力で寄付を頂くのも重要ですが、網走市の魅力をもっと周知して網走応援団を増やしていくべきだとおもいます。返礼品の内容が食べ物だと、届くまでの品質管理が難し

くクレームに繋がるのでサービスの提供の返礼品、網走マラソン参加招待券、極寒シバレ体験、道東強運スポット巡り券など網走らしい内容の返礼品を用意するのを検討していきたいです。

その他 見学視察場所

※北海道議会（札幌市）

※天童木工（天童市）

令和4年度 総務経済委員会視察報告書

網走市議会総務経済委員会
村椿 敏章

総務経済委員会は3年ぶりに行政視察を行いました。視察先は日本防災技術センターと横手市と天童市です。視察順に報告します。

1. 札幌市 日本防災技術センター

10月18日（火）、日本防災技術センターを訪問し、防災訓練を強化するためにバーチャル技術を用いた取り組みについて説明を受けました。

これまでは、訓練用の消火器を使用したり、煙の中を避難するなど体験型の防災訓練を工夫してきた。しかし、火を消す緊張感が足りなかったり、煙の体験は屋内に煙が充満するなどの課題があったとのことです。

そこで考えたのが、VRではなく、AR（拡張現実）技術を使って火事の様子を体験するソフトを開発したとのことでした。カメラを顔につけて、現実の映像の中に火事が発生し、消火器（コントローラー）で消す体験ができます。また、時間とともに煙が充満する様子が映し出され、煙を吸い込まないようにかがんで逃げることを体験できるものです。

費用は「ソフトがインストールされたカメラ」と「コントローラー」で35万円となります。ぜひ、防災訓練に活用してほしいとのことでした。

説明するためのテレビにつなぐケーブルは別、レンタルは現在検討中だとのことでした。

以下はホームページからの画像です。



詳しくは日本防災技術センターホームページ

<https://www.ni-bousai.co.jp/arbousai/>

2. 横手市

10月19日（水）横手市の公共交通について視察しました。

横手市は平成17年に1市5町2村（横手市、増田町、平鹿町、雄物川町、大森町、十文字町、山内村、大雄村）が合併して一つになり、人口約10万人の横手市になりました。

地域公共交通について

合併後の平成19年度～24年度にかけてバス事業者から路線バスの廃止協議があいつぎ、廃線により、乗合タクシーや乗合バスが運行していました。地域の足をどう維持していくかということで、平成22年度に横手市地域公共交通総合連携計画を策定し、持続可能な公共交通システムの確立を目標にしたということです。

公共交通の路線数

現在の公共交通の路線数は、JRが2路線、路線バス15路線、循環バス1路線、代替交通（乗合タクシーなど）5路線、コミュニティバス3地区、タクシー8社となっています。

デマンド交通の導入について

空白地帯解消のため、タクシーによるデマンド交通導入を検討するため、タクシー会社10社により実証実験を平成24、25年度9月まで行っています。利用者は市の中心部にある病院などへもデマンド交通で乗り入れしてほしい要望があり、バス事業者から反発はあったが、まずは実験を開始したとのこと。

平成25年2月に市民5,000人にアンケート調査を行い、2,235人から回答を得ています。デマンド交通に対しての要望は、料金の安さやいつでも利用できるもの、自宅まで送迎が求められています。また、市内中心部を走る循環バスについては病院、スーパー、市役所など通ってほしい場所が挙げられています。

実証実験後、25年度10月からデマンド交通と循環バスの本格運行が始まっています。令和3年度の事業では36,000人が利用。総事業費は年間6,630万で、利用者負担は2,500万（平均690円）、市の負担が3,000万となっています。

課題は必要な方へ利用方法等の情報が届いているかどうか。利用が増えると市の負担が増えることへの対応。一人利用が多い現状をどう改善するかということでした。

共助運営体ミニバン運行について

路線バスの廃線にともなう乗合バス（上畑線）の運行が開始したが年々利用者が減り、5年間で約3分の2となり、一人当たりの経費は3700円（H25）から5600円（H29）の2倍近くになったことから、市は平成29年度に自家用有償旅客運送の登録を取得し、トヨタ自動車と連携してミニバンの運行実証実験を行いました。

その後、平成30年10月から狙半内（さるはんない）共助運営体により運営されていて、午前2便午後2便が運行し、利用者は年間1,246人となっています。車両は市の公用車を無償貸与、燃料費は市が負担しています。予備車両は公用車2台と会長が所有する車。運転者は9名が登録していますが、高齢化が進み担い手不足が課題となっているということでした。

感想

感想としては、横手市役所職員が元気だったことと住民の足を守るために地道な努力をしている姿が見えました。

横手市議会については市議会をチーム横手と称したり、市議会のマークを持ったり、議会の活性化を進めていることに刺激を受けました。

昼食をとった秋田ふるさと村という総合観光施設は8年前くらいにできたようですが、規模が大きすぎて、入館者があまりいない状態でこの施設は運営できるのかと心配してしまいました。お土産屋の人たちは静かでした。その中で網走に毎年訪れるタケノコの皮で紙すきをするご夫婦のお店があり、視察先での出会いがあって嬉しかったです。施設内には銀細工や竹細工など伝統芸能が展示されていて、秋田県の人たちの昔からの営みを感じました。

街の様子ですが、ホテルの窓から駅裏が見え、大型店舗や新興住宅地として新しいまちづくりをしている様子がかがえました。一方で駅前には廃業したような古いホテルと私たちが宿泊した新しいホテルがあり、異質な感じがしました。翌日の朝散歩してみると、駅前再開発が1年前くらいから始まっていて、図書館やホテル、駐車場、共同住宅などが整備される計画だとわかりました。古い街並みの中に新しい街ができつつあること横手市の駅前は今後活気づくのだろうなと思いました。

3. 天童市

10月20日（木）天童市のふるさと納税のとりくみについて視察しました。

ふるさと納税のとりくみが市長直属の組織（総務課）から始まっている事、現在はふるさと納税推進室として職員4人と会計年度職員4人で運営されています。申込受付、特産品の発注、寄附の採納、入金処理、証明書の発行など外部委託がなく、すべて直営で実施している体制で運営していることがわかりました。

寄附の受付状況

寄附の受付状況は返礼品を取り扱いはじめた平成26年には58,000件、平成28年度には推進室を発足させ、20万件の受付件数、33億の寄付金額としています。平成29年9月から返礼品割合が30%となり19億円に減りましたが、令和3年度には30億円を超えています。まちづくり全体が将棋のまちであり、フルーツのまちとして、徹底しているところに、魅力を感じました。

返礼品について

子どもたちへの寄附メニューには「天の童（わらべ）の育成」と称しているのもなかなかです。寄附の申し込みはふるさとチョイスと楽天が98%となっていますが、市の特設サイト（<https://www.furusato-tax.jp/city/info/06210>）で1300件と紙による申し込みが2600件となっています。



特設サイトから

返礼品は636品、43事業所となっていて、85%がフルーツで桃、サクランボなどです。お米が11%、加工品が3%となっています。

返礼品を特産品として決定するのも職員が商品を見に行き決めているとのことです。ふるさと納税制度は政府がいつやめるかわからないことから、生産者への支援もあるが、制度に頼らないように気を付けている。あくまでも市の認知度をあげることに好感度をあげることを目的としているところが税収だけでなく「まちづくり」「ちいきおこし」としているのに

感心しました。

苦情も推進室で対応していて、生ものなので腐っているとか、いつ届くのかとか、おいしくないとかのクレームが多いとのことで、苦勞している様子でした。でも、クレームを言わずに天童ファンが離れて行ってしまうことが一番怖いと言っていました。まちづくりを徹底している様子が印象的でした。

感想

繰り返しになりますが、天童市のふるさと納税の取り組みは、職員の方々がさくらんぼ、桃、りんご、ラ・フランスなどフルーツを中心にした返礼品を選び、発信しています。その返礼品で天童のファンを増やし、天童市へ来て欲しい、第2のふるさととして選んでもらいたいというのが狙いです。まさに観光人口を増やして行く計画です。返礼品の選定や苦情対応を8人の市職員が行い、きめ細かい対応に心がけていることがわかり、非常に好感が持てました。

全体を通じて感じたことは、コロナ感染によって現地を訪れることができなくて、この間オンラインによる視察がありましたが、視察先の様子が十分に見えないという状況がありました。今回は現地を訪れての視察で、説明される職員の熱を感じましたし、議会の様子も見られたので、現地を視察することの重要性を感じました。非常に参考になりました。

また、視察前の体調管理には十分に気を配る必要があると感じました。